

外交論文コンテスト 最優秀作品発表!

コンテストへの多数のご応募ありがとうございました。厳正なる審査の結果、入賞者は以下の方々に決まりました。

【最優秀賞（賞状・賞金五万円）】

持田雄太郎（東京大学法学部三年）

【『Web2.0と』第二の外交』】

【優秀賞（賞状・賞金二万円）】

品田純也（学習院大学法学部三年）

【日中相互理解に向けた複合的ソフトパワーの構築】

篠崎正郎（防衛大学校総合安全保障研究科後期課程二年）

【イギリス外交史が示唆する『対等な同盟』の幻想】

【最優秀受賞受賞のことば】

外交というと、伝統的に安全保障を中心に分厚い蓄積がある。しかし、一人の大学生として世界とのつながりを考えたとき、最も身近に感じたのがインターネットの世界であった。昨年六月、東京大学の国際交流プログラムでコスタリカを訪れたときも、現地の外交官や各国の学生たちと、アメリカ政府が積極的に進めていたSNSによる双方向の発信が話題になった。いまの自分の視点から世界をみたとき、どのような可能性が開けるのか。その考察がこのような高い評価をいただき、とても嬉しく思っている。

持田雄太郎

【論文コンテスト講評】

論文コンテストへのたくさんのご応募に、心よりお礼申し上げます。審査は、最終候補に残った八作品を各審査委員が個別に評価した上で、合議によって入賞作品を決定した。結果として右の三論文を入賞とした。

持田論文は、「アラブの春」でも顕著に示された、ソーシャル・ネットワーク・サービスなどの新たなメディアが政治・外交に与える影響と可能性を論じ、時宜を得た素材を扱っている。分析構成とも水準が高く、題名にもセンスを感じさせ高い評価を得た。

品田論文は、中国国民の多様な日本観を内在的に理解しようとしていて面白かった。ただ、分析がやや断片的で全体としての主張に迫力を欠いたところは残念であった。篠崎論文は、日本人が憧れがちな「対等な」米英関係というイメージについて、豊富な歴史の知識に基づいてその現実を読み解いた重厚な作品である。願わくば、日本外交への提言の要素がもう少し鮮明であると、なおよかった。

応募作品全体をみると、学生からの投稿が八割を占め、テーマとしてはパブリック・ディプロマシーやソフトパワー、中国を対象としたものが多かった。現在の若者の関心を反映しているのであろうか。日本外交の現状を批判的に考察し、荒削りであっても大胆な提言を行うような論文がもう少しあってもよかったかもしれない。

このコンテストが、今後、外交に関心を持つ人々の交流・発信の場として発展していくことを期待したい。■

審査委員（「外交」編集委員）

中西寛・長有紀枝・春原剛・宮城大蔵・吉崎達彦